88　モーイ親方（二）

（薩摩の難題）

これはね、薩摩藩から琉球藩に対して三つの難しい問題を押しつけられたそうですね。

まず一つは、灰綱（アクジナ）。そしてもう一つは雄鳥の卵ですね。もう一つは今、那覇の東にあるガーナー森（ムイ）という森（ムイ）があったそうですが、その三つを薩摩に持ってこいという問題が言われた。そして、当時の沖縄には、摂政三司官というのがいたわけですが、

「これはどうすればできるか」ということで非常にみんな心配して。それ、できるもんでないから。

その時に、伊野波という若い侍が、これが、その伊野波という親爺がこれを解答する役目だったわけだそうですね。そうして、それを朝も晩も心配していたところね、この、息子の、これはモーイと言いますがね。モーイというのはやんちゃでね、もう、片一方は下駄、片一方は草履を履くという。人には分からないが、これは一生懸命勉強した。朝はもう闘鶏、鶏を持ってあっちこっちともうやんちゃばかりやった。だから、世間からは馬鹿者扱いされておった。

そういう子どもが、

「なぜお父さん心配しておるか」って言ったら、

「こういうことがあるんだということで、今、首里の城内ではみなそのことで心配しておる」と言ったら、

「そういうことであれば、私が行って返答してきましょう」と言ったら、親爺は、

「君がそういうことをできるもんじゃない」と言ってこれを納得しないわけです。この子があんまり強硬に、

「私ができますから。お父さんにはできないけど、私ではできるから」ということで、やったら、とうとう首里の評定も評決して、これを行かすことになるんですね。

その時に、薩摩に行って、この人が答えたことが、まず、灰綱（アクジナ）というのはね、縄を綯（な）って板に置いた、それを火を付けて焼いたままやる。そうして、

「雄鳥の卵をどうしたか。あんたのお父さんがこっちに来るべきであるが、何で来なかったか。代理で来たのはどういうことか」と言ったもんだから、この子ど

もが言うには、
「お父さんは産気づいて来れません」。
「男が産気づくわけないじゃないか」というあれでしたから、
「何で男が産気づくわけがないのに、雄鳥の卵を持って来いというのはどういうことか」と言うたら、それもパスしたと。
　それともう一つ、ガーナー森という、一つの岩山ですよね、
「これを持ってきたか」と言ったら、
「これは、起こして港の側まで持ってきておるが、それを載せる船が琉球にはないので、薩摩藩からその船を寄越してくれ」と言ったら、薩摩藩にもこの大きなあれを載せる船がないもんだから、それでいいということで、その三つの難題を無事に解決して帰ってきたという。

字真栄里　島袋仁栄

類話

字糸満　上原カメ、野原由宗
字武富　長嶺陽元　大城トミ
字北波平　大城清助
字賀数　照屋亀八、大城政秀
字兼城　大城幸亀
字照屋　上江洲由豊
字豊原　仲井真盛幸、国吉マツ
字真栄平　大城テル
字新垣　宜野座仁一郎
字名城　新垣武登
字糸洲　中村光一
字南波平　伊集朝助、山城亀六
字東里　上良武定、下田ミツ（上里区）
字福地　殿内三吉
字山城　仲門用三

つづきはこちら